

里井陸郎君の歌

田中順 二一

去年はハハキギ（帚木）が故吉沢義則先生を中心にして創刊された昭和五年からちょうど五十周年目に当り、秋十月十九日にその記念会が催され、現会員や歌壇関係の人々のほかに、土橋寛・池田茂登・野中春水・谷山茂・吉池浩らの創刊頃の編集に携っていた諸氏も出席されましたが、その中にぜひ出席してほしい里井陸郎君の顔が見られなかったことは残念でなりませんでした。

里井君は高知高等学校在学中のころから作歌をはじめていたらしく、昭和十一年四月に京都大学国文学科に入学すると、直ちにハハキギの会員となり、誌上に毎月その歌が載るようになりました。そうして編集部の一員として、われわれとともに行動をとるようになったのです。その年卒業しながら、極度の就職難のこととて、京都・大阪辺にうろろしていた私との交際もそのころ始まったのですが、里井君は創刊頃の大先輩をはじめ中先輩や小先輩を向うに廻して、会の内部に「新人会」というのを作り、その中心として若々しい歌を作るとともに、さかんに歌論をもちかけて先輩連中を刺戟したりしたものでした。やっと中学校教員の口が見付かり滋賀県の膳所へ赴任して四年、京都府立第一中学校に転任してからの私は、里井君が世話をしてくれたすぐ隣の借家にいるようになってからは、互いの私生活でも密着するようになりましたが、ハハキギの編集については、ずっと京都にいて同志社に勤めていた里井君の方が重要な人物になっていて、私などは第一線から退いているようなものでした。その当時里井君の作った次のような一連の歌が誌上に載っています。「田中順二、一中に転じて借家を求む。をりふしわが預りの隣り家空きて人住まねば」という詞書があります。昭和十七年十二月号の作

品欄です。

おそき月いでて寒けき街々をさがしあぐねてやうやく来にし
我が家の隣りのあき家見に来たる順二の肩におそき月の出
ほのぐらき電池をともし丹念に部屋のかまぐま見てまはるかも
隣り家の天理教会に鳴りいでし大鼓の音をしきりに気にす
乏しき電池の光りに見て来たる空家の記憶をととのへてをり
見て来たる家の間取りを丹念にノートにうつし順二は去にぬ
教会の大鼓のことをわびしげに話してゐむか家にかへりて
引こしのことに絡まる煩雑さをいひむしろ順二はたのしまぬらしき

私事にわたるようで恐縮ですが、こういう歌を今読み返してみると、作歌をとおしての里井君の暖い感情がよみがえってくる思いがいたします。

今、誌上に載った里井君の歌の中から、すこし引用してみましよう。

街灯のほのかにとどく窓明り外は静かに雨の気配す
(11年・2)

春濁る川水に住む積舟は風寒き日を片寄りに居る(堂島川)
(11年・4)

河岸の一膳飯屋に飯はめば水ぎらふ陽の薄く照りかへる
初夏のあきつ悲しも晴れ強き光の中に眼動かさず
(11年・6)

牛を殺す村人達は淋しもよ山裾に距たりし部落を作せり
(11年・7)

夕もやよ静かに来れ屠るもの屠らるるもの罪あらなくに

梅雨寒き奈良野を廻り西晴るる駅の広場に帰り来にけり
(11年・8)

谷深き木の間にこもる池なれば白雲うけて空明りせり

門を行く涼みの人の足音を聞きつつおそき飯はみてをり
(11年・9)

遠くして花火の揚る音きこゆ宵に行きし子等見てゐるならむ

百姓等数多集り来りし夜家売る心決めし父なりき
(11年・11)

薄暗き寄席の一隅に立ちつかれ娛しむとせぬ己れを意識す
(12年・1)

わが家の壊たれし跡へ建ちしとふ幼稚園に桜花は咲き満ちてあらむ
(12年・5)

千切れつつ峰吹き越ゆる雲のかけしばしば落ちて寒き萱原
(12年・6)

窓近き笹の葉風のかそけきをこの小夜更けに醒めてききぬ
(12年・11)

家ぬちに夫婦あらがふ声ききつつ雨に濡れたる路地を抜けたり
(13年・4)

小鯛を生姜と煮ぎて骨ぐるみ食めばしみじみ故郷の思ほゆ
(13年・11)

子等いにて小暗き雨の教室に黒板の字を消してをるなり
(13年・12)

鬢白く老いづき給ふちちのみの父を守りて寂けくもあるか
(14年・1)

遠つべの雲ゆ吹き来る時雨ありて我の眼鏡のすこし濡れたり
(14年・5)

夕まけて寒くなりたる湯の峰の宿の障子に春の蚊はあれ

立ちのぼる湯気にさす陽の鈍ければ湯槽の底に深く透らず

夕還御きはふ御輿が我軒の瓦をくづしなだれゆきたり
(14年・9)

鶴嘴を振ふ工夫の群の中を突き抜けてゆく自信は持たず

秋風に甘蔗がさやと鳴る音はむかしきたる音にあらじか

(14年・10)

物食へばどぼりとどぼりと鳴る胃の腑その胃の上に鍼打つ我は

(14年・11)

水飲めば水が鳴るなり芋食へば芋が鳴るなり淋しき胃の腑

(16年・6)

いささかの賞与になごむ心ありて生れ来る子のことなどをいふ

天伝ふ陽光は洞にとどかねばおのれ光るか苔群の青

(16年・11)

霧深く沈める村のいきづかひあかときくらき眼ざめに沁み来

昭和十六年十一月号には「わが家のこぼたれて売られゆきしは、青嵐の頃なりしか、秋の日の深き光の中なりしか、混然として既に記憶なし。風吹く度に、丁々たる倒壊の音きこえ来るが如く」という詞書の次の一連があります。

白壁の土蔵のついえ久しくてみだれ伏したるコスモスの花

コスモスの葉の切っ先は白壁にゆれてぞうつる朝風吹けば

コスモスをつつむ光の乱れつつ白壁に沁む時たちにけり

秋深き光の中にわが家の倒れてゆきすがた目に見ゆ

倒壊のひびきよむしろすがしきか丁々として風に消ゆべし

この翌月には日米開戦となり、時局は急激に暗黒時代に入ってゆくのです。

色づかぬ秋のトマトはどぼ漬にすればうましと聞きて来ぬ妻は

(17年・10)

新しぼり葡萄の酒をさげて来し梅吉爺を二夜寝ねしむ

ぎらぎらと油流るる堂島の水を見下す一膳飯屋

ライスカレーからきをはめば真向うに今までゐたる図書館が見ゆ
野に寒く枯れゆく木々のすなほなるすがたを眠りぎはにおもへり

(18年・1)

わがねむるたたみの隅に壁土のぼろぼろ落つる音をはかなむ
十ばかり干しつらねたる渋柿も食うてしまひぬ冬ならぬさきに
女湯にしきりに母とふざける吾児の気配よ心たのしむ

(18年・2)

「長女美古二歳」とある一首です。

比叡ヶ嶺に向へる窓を明けはなちいばりをせしむ寒き瓦に

ごま塩を玄米くろこめの上にふりかけて美古は貪婪の振舞を見す

花びらを黒木の床にまきちらす子の美意識はそのままにせよ

かがやきて庭の梢ゆとび立ちし鳥も冬空の光りとならむ

(18年・3)

隣り家の鶏が入り来てついでにみし波蔭草をいまにをしめる
蚕豆そらの芽吹きそめたる一畦うねを見まはりいそぎつとめにいでゆく

配給の吾児が菓子パンは二つなり一つは父と母がくらふも

食糧事情悪化の頃の作です。

初恋をわが言ひしより拗ねてをる妻と夜店の街にいでゆく

(18年・4)

暗い時代の中にも、こういうほほえましい一首も見られます。

軒並のあはひに湧ける夏雲の光りが街にかがよふ夕べ

(18年・9)

不機嫌に母を呼ぶ子をもてあましいかりやすしも汝の父は

(18年・11)

並め植ゑしひまのまる実の朝かげにさゆらぐ見れば秋づきにけり

(19年・1)

きみら征く霜夜の冷えを軒なめてしづけく煌れり書店の灯火

日々なめて君らを送る街の灯の光りともしく冬に入る京

この二首には「学徒出陣のうた」という詞書があります。

遂に書売る外なきか立て並めし書を選びかねていきどほろしも

(22年・4)

これから以後は敗戦の結果、ハハキギも一時廃刊となり、昭和二十二年四月から復刊してからの歌となります。

菜を植うとしひたげられし山茶花の乏しき花に心動くも

(22年・6)

埃だつ疎開地跡にかかりたるサーカスは天然の美の楽を鳴らさぬ

(22年・9)

三人の子らを連れ来て宙返り我さへけ呆て見るにあらずや

時折は雲の影ゆく屋根の上に衰へしるし南瓜なんきんの葉は

この頃のハハキギの編集はほとんど里井君一人の責任に任ねられていて、昭和二十七年までその苦しい努力がつづいたのです。

おそ桜散りのまがひに眼下の渦なすながれしづかなるかも

(23年・6)

千本より北野に到る軌道工事のろろすすみて秋づかむとす

(23年・11)

病む妻のかたへに膳を持ち来りいささかの酒飲めばなくさむ (24年・2)

一台の電車が吐ける人波は必ずぐる棕の木の雨を (24年・7)

照りかへすたらたら坂の石だたみ上り下りして長崎は暑し (24年・12)

霧のごとけぶれる街にいでゆきて灯の点るをば見て帰りたり

何ゆゑにかくくれないるの色を流し沈まねばならぬ没陽かと思ふ (25年・5)

出で際にねだりゐしグリコポケットに手握りをれば安きが如し (25年・12)

月の中二十日はもたぬサラリーの軽き袋をいかにせよとか

更けゆけば妻が内職の機械編が書斎にまでひびき来るにも馴れたり (27年・6)

たたかひを憎む心の一途にて今の生甲斐はそこに集中す

追立つる家主一人を罵りて足らふ私の慎恚にあらず (27年・9)

反俗の精神といふを貴重なる特権の如く恃み来にしか

虐げられし人々の側に自らを意識する時涙ぐましも

御所にてる秋の陽のかげあらはにてこの国再び軍備を持てり

これ以後どういふ訳か作歌は断たれてしまいました。この終りの方の歌には里井君らしい社会観が見られます。歌人としての里井君の一面を知って頂くために、五百六十三首の中から紹介いたしました。